

「巖本善治の子」

青 山 な を

中野清子さん「巖本善治長女」が「父が再婚してをりましたら、面倒なこともなくすぎたであらう、とおつしやる方がありますが、どうお考へになりますか」と言はれたことがある。その表情と、その印象は、今でもはつきり残つてゐる。思ひつきの問ひではなく、長い問考へぬいた言葉であらうと思つた。私は不用意であつた。うけとめる返事を見出すこともできず、「さう考へるのは常識なのでせうね」といつたやうなお座なりをいつてしまつた。まことに申訳ないことであつた。その後味の悪さのためかどうか、清子さんの出された問題は、私の胸の底に沈んでしまつて、私の問題になつてしまつたらしい。「女学雑誌」などで、巖本の文章を読んでゐる途中で、これは答にならないか、と思ひ、それが二つ三つと、たまつてきてゐるのである。いま、そんなことをとり出して、考へてみようと思ふ。

結論を先にいつてしまへば、巖本は、再婚の相手、つまり幼い三人の子供達の、継母となる人を見出しかねたのではなかつたか、さらに直截にいつてしまへば、亡妻若松松子の遺児を、継母の手にかけたくなかつた、継母継子といふむづかしい関係の中に、まきこみ

たくなかつたのではないか、と思ふやうになつたのである。

もつともこれには、清子さんの話が暗示となつて、働いたのかもしれない。清子さんはいはれた。「父は私共子供の為めには随分心をつかつてくれました。夏になれば必ず海水浴をさせるやうはからつてくれましたし、万事宜ういふ風でした。弱い母から生れ、病床に親しんでゐる母と暮しながら、私共がとりわけ健康に育つたのは、父の心づかひのおかげだと感謝してゐます」といはれた。清子さんは健康についてだけいはれたが、教養も深く広く、学校教育についていへば、清子さんも令弟莊民氏（幼名莊治又正治）も、東京で高等教育をうけた後、アメリカの大学に学んでをられる。

「女学雑誌」を読んでゐる間に、心にとまつたのは、巖本が幼時を語る文字である。第九号巻頭社説「日本の家族」の第一「一家の和楽団欒」のはじめに、李白の詩、スイートホームの英詩をあげ、次ぎのやうにかき進んでゐる。

余之を聞いて撫然として長歎す。抑も余六歳にして生父生母の膝下を去り爾來遷転流浪して近年に至りぬ 此の問素より人の仁愛

好意を辱^{かたじけな}ふして差したる不自由の境界に陥いることなきを得たりとは云へども、多年直接に父母の懇切なる撫育を蒙^{まか}むること莫^なりしが故に、今や自ら省みて吾が品質の甚だ貧しきを知り温容沢々の人に面する毎に未だ嘗て恨思せざるなし。聞く昔フレーベル夙^はく母を失つて頑陋^はの老保母に育^はくまれ、不幸にして其乱暴なる家庭の教育を蒙りたるが故に長じて後痛歎止まず、自から其の人と為りを評して弥よ怨恨の思に切^きまれり、此に於てか幼年の教育の人の一生に最も大切の關係あるを辨知し、則ち始めて幼児教育の新方法を工夫し自ら力を尽して之が為に一生を送る、その幼稚園なるもの即ち其の創めて起す所のものと傳す。

余不肖素より為すあるに足らずとは雖も多年肉親以外の家にきすらひて優^{ゆた}かに温愛の養ひを受けず、詮ずる所一身に餘毒を残していよ／＼自からの足らざるを辨知したるが故に、則ち家族無育の、人の品徳に重大の係りあるを認め、及ばずながら後人をして再び此類の怨恨を受くること勿らしめんことを切望し、敢て其事に任せん^と欲するなり。

この後なほこまごまとその心理を分析し観察してゐる。
九六号は明治二十一年二月十一日発行である。この時彼は數へ年二十五。翌二十二年七月十八日に、横浜海岸教会で、松川甲子^{かし}即ち若松賤子と結婚式をあげてゐる。

つぎに引用しようと思ふのは、五〇九号の家庭欄の「居候そだちの述懐」である。署名はないが巖本にちがひない。社説と違つて袴をぬいだ氣易さがある。しかし、背骨のしやんと伸びた姿勢の文章である。

年幼なくして父母の膝下を離れ、早くより他人の中にまぢりて、居候そだちせし某と云ふものあり、或夜、春雨閑談の末につづくくと身の素性を語り、深く過ぎ越し方を回顧して、嗟嘆禁ぜざるもの、如く、太息して吾に談じける様は、さて／＼吾身ながら愛想のつきたる氣質かな。世の円満なる人達を見るにつけ、吾身はいかなれば斯くねぢけたりやと、應^{おそ}ろに悲しさに堪へず。必竟は余り早く他人の間に按まれて、父母の温たかき御手に撫でらるゝことの短かかりし故と覚るにつけ、家庭の感化の如何に強大にして、其の感化の人の一生に及ぼす影響の如何に深厚なるやを思ひ起し、今更の如く家庭の勢力の大ひなることを知れりと言へり。

此人の懺悔する所によれば、余り早くより他人の間に按まれたるものは、皆中々に鋭敏になりて、決して馬鹿はなけれど、又其の割には應揚の所は甚だ欠けたり。何事を為すにも、先以て利害善悪を熟慮したる上の事とすれば、直覺直感して、一氣呵成に天真のまゝ事を為す趣きは絶へてなし。左れば為す所寧ろ才に傾むきやすくして、至誠己むを得ず、在のまゝに実行する自然の素朴は欠けたり。兎角人を疑ひ、容易に信ぜず、常に邪推の眼を以て之を測量しつゝあり。馬鹿げたる所は、無さすぎるほどに無くして、小利巧らしき所は、悪らしきほどに露はれたり。一言するに愛嬌なし、あるも造りたる愛嬌にして自然の愛嬌にあらず。人を引付けるよりも、人を揆ね返し、人に氣を許さすよりも、人の胸襟を閉ざさする傾きありと是れ皆な温たかき真の父母の膝下に育たずして、義理づくめ、理窟づくめの冷たき人の手に育てられ、朝夕、苦勞をしながら、辛ふじて人となりたる故による也。

嗚呼、幼けなき時は、慈愛ある両親にあつく保護せられ、只但だ信じて楽しく世を送り、人は皆信切なるものと思ふて暮らすべきものなり。此心、土台となりて、他日の好性質、善氣品を造りあげべきに、其の幼時、其の初代に於て、早く既に人の悪辣手段にあひ、世をからきもの、人を恐ろしきものと思ひそめて、後の一生を危懼疑惑の中に送らんとす、人間の幸不幸いかばかりぞや。而して、其の由縁の基は、人の手に育つか、親の手に育つか、親の手に育つとも、其家庭に混らざるものありて、自由に親の愛撫を受けることを得ざりしや否やによりて、亦大いに岐るとせば家庭の風光の人の一生に及ぼす運命も亦大ならずや、云々。あゝ此人や、斯く自から歎くことを知れる、其の知れることが既に病の兆候なり。人もし自から知らざれば、病も亦或ひは癒えんとする也。かへす／＼も痛ましきは、幼にして親を失ひし人にぞある哉。これ誰をか責むべき。寿命か、運命か。それも及ばじ、たゞ及ぶべくして人の自から心得べきは、此の故に人々よく衛生を重んじ、体を丈夫にして、吾が愛子の為に丈けにても、長生をせよとは言ふ也。

人の上にしてゐるが、勿論巖本自身の反省であり、告白であり、歎きであり、悲しみの吐露であらう。この時すでに彼の妻は世になく、明治二十九年に、三歳、六歳、七歳で母に別れた子供たちは、長男^{まさはら}壯治が十歳、清子^{しみず}民子の二女は、十一歳と七歳になつてゐる。

色々の方の探索の結果の文献や報告などの恩恵によつて知つたことの要点をあげてみると、巖本善治は、文久三年（一八六三）六月

「巖本善治の子」

十五日、但馬国出石町八木五番屋敷、豊岡県士族井上藤平二男として生れてゐる。兄藤太郎、弟文三と、いく、かめの妹二人がある。母律は明治六年三十二歳で死し、時に三歳の末女かめは（後木村駿吉に嫁す）叔父石井家に養女となつて育てられた。二男の善治はすでに、明治元年七月二十日、母方の叔父巖本範治の養子となつてゐた。

巖本家の戸籍は、明治九年九月九日、養母きさの入籍を記し、明治十四年範治の長男捷治を生んでゐる。善治が上京、中村正直の同人社に入つて苦学を始めたのは明治九年九月であるといはれてゐる。養母の入籍と前後して上京してゐることになる。実子捷治の生誕にもかかはらず、明治十六年十二月十三日、善治は巖本家の戸主になつてゐる。満二十歳になつた故であらうか。折目の正しさを尚ぶ家風を感ずべきなのかもしれない。

ついでに妻若松賤子の場合をみてみよう。彼女は元治元年（^{キノエネ}甲子）三月一日岩代国会津郡若松岡弥陀町六番地松川勝次郎の長女として生れた。生年の故に甲子と名づけられる。父は勘定奉行で、かつ謀報役であつたので島田と称し、生地を離れてゐることが多い。明治三年甲子七歳の時、生母は二十七歳で死去した。たまたま商用のためこの地に來あはせてゐた横浜の山城屋の番頭大川甚平は、彼女を養女としてもらひうけ、妹のみやは親戚に引きとられて養はれた。五歳であつた。横浜につれられた甲子は、当時谷戸橋傍のへボン療養所内に塾を聞いてゐたミス・キダーの許で教育された。この家塾が後フェリス女学校となるが、甲子は十九歳で明治十五年此処を卒業

し、助教として母校に残った。明治十八年七月三十日、大川家の養女の籍をぬき、父勝次郎の籍に帰つてゐる。善治との結婚式は、明治二十二年七月十八日横浜海岸教会であげられ、戸籍には明治二十二年十月二十一日東京市麻布区霞町松川一姉勝次郎長女入籍と記録されてゐる。

以上きはめて簡単に筋だけ並べてみても、松川家の客観的情况は、巖本家の場合にまさるとも劣らぬ波瀾にとみ、冷酷な運命にさらされてゐる幼児の姿を映し出してゐるといひたい。青年巖本善治が、クリスチャンホームの温かく明るく、花の香りにむせるやうな平和な上品な家内の雰囲気を夢みて、日本の家庭を、家族制度の暗い霧に包まれた冷湿な牢獄のやうに思つたのも、無理からぬことに思はれる。

さて、『女学雑誌』五二二号は、最終号から逆に数へて四号目で、明治三十六年十月十日発行されてゐる。随想欄に、「幼児の書信」と題する一文がある。

幼き人の書く文は、いと些細なる事計り心づく故、反つて実状歴々、大人の書信にまさるものなり。(畧)誰が居らしつて何を下され、何処に行つて何を食べ、猫が鼠をとつて、ひよこが何疋生れ、犬がどんなに遊んで、何をしたらと云ふぞなど、彼等に取りつての一大事なれば、いと真面目に而して極めて無邪氣に此等の事を認むる手紙こそ、寧ろ反つて実状を表現し、客路遠征の旅人をして、極めて濃密なる想像を惹き起さしむることを得るなれ。わが旅するうちは、子供等三人日に日に書信を寄するの定めなるが、

近頃、二週あまり外にありける時、送り越せしものは、取わけ余をしてこの感を強くせしめたり。

と前書して、「九歳の末女」の手紙十点はかり、「十三歳の姉」の「少々文章めかす故、反つて音信の足らざる所」ある手紙数通、「十二歳の男児が書く所は全然趣を異にせり、亦一興にあらざるや、たゞ一書をあぐ」としたものである。巖本の三児、民子清子莊治が、九歳、十三歳、十二歳といへば明治三十五年で、母と死別して七年近くたつてゐる。民子の手紙には前書にある通り

父上様 今日はおかん^{堀工場}はにまいました 帰りに氷水をのみました お家のけしきはよろしいですね 名古屋は景色がよいございますか (畧) 黒はあいかはらずしつぽをふつてまいます 今日はおちゃんがさわいだからお手紙がよくかけませぬ 猫はまいにちごはんや水を食べております 猫はものおきの中でニャー／＼グウ／＼となかないときはありません ひよつこはピヨ／＼なく 鳥はコケコウ／＼となきます さようなら

とかき、また「父上様私は毎日／＼お手紙をあげますから書くことがありません」とか、「民子は一度もお手紙をやすみません 今日^{牛肉}はぎゅうにくを食べました 大そうおいしうございました 父上様に上たくおもいました ごちそうさま オヤスマイナサイ」などある。

清子は、同じひよこを次のやうにかく、

○ひよこは四匹にてなかなか丈夫にて候 垣をつくれと仰せられしが 程よき籠が候ひしより一つに皆おし込め候 親どりはそばへ行くと羽をひろげて怒り候 ○ひよ子は日に／＼生育し もは

や米も麦も平氣にて食べ、ピョ／＼もすこしピョ／＼になり候といふ風にかき、「鳴海しほりは細きかすりこまかがよからめと存じ候」と土産物に注文をつけてゐる。

○巢鴨の萩は今がさかりにて来客あることに嘆賞せられ面目をほどこし候。○庭の萩今散りかゝらんとす。萩また父上の帰校をまつが如く頭をうなだれ手もでさしまねく。夕がほ朝がほも毎朝競ひがほにて美しいいはんかたなし。

など少女らしい。巖本の帰宅延引も共通の事件になつてゐる。

○父上様御端書どうもありがとう。きつとおかへりが早くなるのだらうと思つたら、そうではなくつておそくなるるとき、ましたから大へんおどろきました。○父上様の手紙をみて荘ちゃんが大へんおこつてをります。……少兄さんはぶ／＼いつて御手紙をかいてをりますよ。さよなら。

と民子はかき、清子は、

荘ちゃんはお父上のお帰りおそきとき、只今よりブ／＼怒りをり今日の手紙を荒々しくかくこそよけれと云ふも誠にをかしく候とかいてゐる。荘治は、

父様は風をお引きなさつたそうでお手紙をみて驚きました。お父様はもう直にお帰りに成事と思つて居たものですから少々當が無くなりましたが、何少々の事故辛棒しましやう。姉さまや民ちゃんや荘ちゃんも怒つて居ると手紙に書きましたが、夫はちがひます。僕は中々怒つたりすねたりしませんから御安心下さい。

と書いてゐる。子供たちののび／＼した手紙をみてゐると、彼等の日常生活の背後に、「をばさま」の存在が控へてゐて、安心感を支

「巖本善治の子」

へてゐるやうに感じられてくる。

「今日をばさまが土用ぼしをなさいました。ほんとに大変でしたよ。昨日をばさまがはなをかつてくたさいましたから。さつそくねいやにすゑさせました。さようなら。」

「今日は寒くは羽織をり着ました。きのう叔母様が民子のはをりぬつて下さいましたから。今日、着てまいりました。」

と民子はかき、荘治の手紙の中には

靴の事は叔母様と御相談いたしました。僕は海水浴の代りだと思ひますから少し上等の靴にしたいのですが、叔母様は余り上等でない方がいゝと仰しやいます。どう致しませうかね。兎に角僕はどつちでもよろしうございます。(しかし成丈上等) きまれば僕と兄様と行まして買ひますから上等でも中等でも下等でも御手紙でお知らせ下さいまし。

とある。叔母様は亡母の妹みやで、兄様は範治の長男捷治であらう。彼は後に明治女学校の教師となつてゐるが、この頃兄の家に暮してゐたとみえる。民子が「少兄さんはぶ／＼いつてゐる」といつたのは、捷治の兄様に対して荘治を少兄さんと呼んでゐたのである。三人の子供達は、叔母と、年若い伯父と、清子の手紙によれば、父から送つてきた瓜を、「先生達皆様へのこる方なく配りましたら皆々様大よろこびでした」と告げた明治女学校の構内の内外に住む教師達の家族にとりまかれて、平和に暮してゐたのである。

かつて、巖本関係の手紙を所持する方の好意で、数十点の手紙をみせていただいた。その中にも子供達の手紙があり、それに同封してみやの手紙もあつた。巖本が朝鮮からの返事もあつた。それには

清子の注文の櫛を、言葉の通じない朝鮮人から手まねで買った光景など、活々とかいてあつた。なほ清子が注文したのは展覧会などであるやうな櫛だと思ふが、今度はこれで我慢して下さいといふやうに書いてあつた。巖本は旅行中も家族からの手紙をもとめ、細大もらさず留守宅の様子の報告をうけ、返事をし、指図を与へてゐたのである。寸時も子供達を守る配慮を忘れなかつたやうに見える。

巖本甲子^{かし}が生前子供達に対する心情は、「病める母と二歳の小伴」など、題名からして感傷あふれるばかりにのべられた文章もあるが、創作はにおいて、直接心事を叙べたものとしては、『小公子』前篇の序文がある。

母と共に野外に逍遙する幼子が、幹の屈曲が尋常ならぬ一本の立木に指ざして、「かあさん、あの木は小さい時、誰かに踏まれたのですねい。」と申したとか。考へて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈のものを屈曲する程、無情なことは実に稀でござります。(畧)幼子は世に生れたる其日と言はず、其前父母がいつ／＼にはと、待設ける時分から、はや自から天職を備へて居りまして(畧)彼の天職は、いとも軽からぬことで御座ります。(畧)邪道に陥らうとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の徳を思ひ起させるのは、神聖なるミッシンを担ひたる可愛の幼子に限るので、是に代つて其任を果すものは他に何も有ません。(畧)又、ホームの教導者を先づ教へ導き、其清素爛漫の容姿を發揮させ、其ミッシンを完うさせるのは、亦両親始め其同胞の務です。

私は深く幼子を愛し、其恩を思ふ者で、殊に共々に珍重す可き此客人を一層優待いたし度、切に希望いたします。夫故幼稚園、小学校などの設は、私の心にとつていとも尊く、悦ばしい者です。夫曰ならず、近來少年文学の類が、ポツ／＼世に見える様になつて来ましたが、これも真心より感謝して居ります、それ故、只今訳して此小き本の前編を出しますのも、一つには、自分が幼子を愛するの愛を記念し、聊か亦ホームの恩人に對する負債を償ふ端に致し度いのみです。

甲子が幼児をいつくしみ、尊み、わが子女を愛する心の深さ、こまやかさは、巖本もみやも、よく知つてゐたことであらう。

巖本は亡妻の十三回忌に、三人の子供の写真をとり、上部の空間中央に、隋円形の枠をおき、妻の遺影をいれた写真を、広い範圍の知友に送つてゐる。その写真は、彼の師木村熊二の文箱の中にも保存されてゐた。「島崎藤村全集」の書簡集には、つぎのやうな巖本あての礼状の端書がある。明治四十一年二月十四日付である。

故嘉志子女史及御愛児の面影御惠贈被下奉謝候 十三年は小生のつたなき身にとりても 短き歲月にあらざりしことを思出で申候 不取敢御礼まで 二月十四日

また古川佐寿馬氏編の若松賤子建碑記念の冊子によれば、この写真は古川家にも届いてゐることが報じられてゐる。佐寿馬氏は、甲子の父、松川勝次郎の弟古川義助の女、きんの夫である。巖本が写真にそへて送つた手紙の文面は、つぎの如きものである。

啓 故嘉志子十三回忌日につき御交誼を追懐し同人肖像竝に三児

の小影版写いたさせ座下に奉呈候 肖像は長女清子が揮毫候ものを態と相用ゐ又子供等が斯く成人いたし候ことは為故人御喜び被下事と信じ差上候微衷御察被下度候 敬白

明治四十一年二月十日

東京府巢鴨村六百六十番地

巖 本 善 治

莊治 十八年

清子 十九年

民子 十五年

物心のつつかぬの年頃で母に別れ、「幼時の書信」では九歳十二歳十三歳であつた子供達が、長女は娘ざかり、長男は青年といつてもよい面ざしをし、末女もまた少女らしく成長したのである。やがて彼等は独り歩きをはじめるのであらう。神妙にとりすました彼等の写真と、四角い活字の並んだ手紙の行間に、十余年にわたる巖本の、こらえにこらえた忍耐と努力の枷かぎがゆるみ、感慨と感傷が湧きたち、たぎりたつて、慟哭のひびきをたてて荒々しく流れ行くのをみる思ひがする。この年の暮、明治女学校は最後の卒業生を送り出して廃校。巖本は、すでに三十七年に校長の席を呉くみにゆつて、校主になつてゐる。

巖本の確乎たる自発的意志の決定の結果か否かはしばらくおき、現実には、彼が再婚しないで子供達の生長を守り通すことができたのは、みやがゐるたからであると誰しも思ふことであらう。彼女は、

「巖本善治の十」

愛児を残してこの世を去つた姉の心事、家庭を忘れて没頭しなければならぬ事業をもつ氣の毒な義兄の立場、何にもまして母に残された幼児の哀れさに、自分の身を忘れて巖本家のために日々を送るうちに、流れゆく年月の長さも忘れ、やがて年老いた自分に気付いたことであつたらう。巖本の歿後二年、昭和十九年暮に七十九歳の高齡で死去してゐる。人の批評は冷たいもので、彼女が「姉さんのやうにすぐれた婦人だつたら、しつかりしてゐたら、巖本先生も問題なくすごされたらう」といつた人は一人二人でなかつた。たしかに子供達の手紙と同封されてゐた彼女の手紙には、たよりないとの懸念を抱かせかねない人のよさがあつた。しかし、だから子供達が叔母さん叔母さんと友達のやうになれ親しんで、屈たなく生長してきたのではないかと考へてみる。この考へに自信をもつやうになつたのは、清子民子の姉妹が揃つて元氣でゐられた頃、清子さんが民子さんに、

「民子さんが叔母さんのお墓をたてて下さつて、本当によいことをして下さつた。」

と話しあつてをられる場になるあはせたからであつたかもしれない。「島田美耶」は巖本家の人ではない。けれども莊民氏は、巖本家の墓地に、母の墓に並べて叔母の墓をたて、それを彼の姉妹が心から喜んでゐる風景は、この世のものとも思へない美しいことである。

巖本は、明治女学校の創立者、木村熊二の妻澄や、甲子のやうなすぐれた婦人を知つたために、はやく女子教育事業が「流れる水に字を書くやうな」手応へのないもどかしい、仕事であることに気付き、その空しさを知りぬきながら、最後に、時流の大勢に抵抗する

力つきて敗退する時まで、初志をすてなかつたのではないかと思ふのであるが、鎧や甲子を飾る円光の色調とは異つた、やわらかいあたたかい榮光に包まれたみやの肖像も、またいつまでも輝やいて、彼女の無私の尊さを示してやまなと思ふのである。

平塚らいてう雷鳥らいとう女史の告別式の最後に、長男の奥村敦史氏が「病中母は皆さんからあたたかいお見舞をうけ悦んでをりましたが、しかし母を見る世間の目は、ついこの頃までつめたかつたと思つてゐます。「新しい女、らいてうの子」といふ言葉は、私どもにも辛い思ひ出をよび起します。」といはれたが、「らいてうの子」以上に、「巖本善治の子」といふ時の世人の疑惑の目、嫌悪の言葉は、彼の子女を傷つけたのではないかと思ふ。しかしそれにもかかはらず、善治の努力と、それにこたへる巖本家の人々の、長い間の努力と忍耐によつて、一家の平和を保ち、互ひに助けあひ、それぞれ見事に社会人として道を開き、生活をうち建てられたのは、立派な事であつた。輕薄な、無責任な、社会の誣言、好奇心の暴力に対する理性の勝利、智慧の勝利であつた。明治精神史上の注目すべき一過程、進化への一里塚の道標として、銘記してよいと思ふ。それにしても世間なみの常識、良識をこえて、真実を求めて歩む者の道は険しい。身近な者の頭上にまで、火の粉を浴せなければならぬ。その上、他人の誣言のみでなく、自から正しいと思つてゐる隙に、誤まることもないわけではないからである。

(昭和四十六年九月二〇日)

餘白をかりて、莊民、清子両氏の手紙により、巖本の子女の履歴を畧記する。

莊民氏は早稲田大学経済学科卒業後、大正七年渡米、ハーバード大学に学び、大正十四年北米ケンブリッジ市で、マグリイト、メグルーダと結婚。帰朝後は主として米国大使館に職を奉じた。マグリイトは、ジョンズ、ホプキンス大学でフランス文学専攻、後リッチモンド大学助教、ハーバード大学のチューターとなり、来日後は東京女子大学、津田英学塾等に教へ、戦後は東京高等師範学校（教育大学）その他に奉職した。愛嬢真理（メーリー・エステル）は、バイオリンの名手として知られてゐる。

清子氏は明治女学校、立教女学院に学び、実践女子学園専門部卒業。後渡米、コロンビア大学に学んでゐる。夫君中野登美雄氏は早稲田大学政経学部卒業。同学留學生としてジョンズホプキンス大学ドイツ、ハイデルベルヒ大学に学び、帰朝後母校に教授、学部長、総長となり、昭和二十三年五月二日死去。清子氏は実践女子学園同窓会長等社会的に活動してをられたが、本年（昭和四十六年）一月二十四日死去された。

松浦嘉一夫人民子は、実践高等女学校卒業。裏千家茶の湯、山田流箏曲の師範免許をもち、静かな上品な婦人であつた。嘉一氏は東京大学英文科出身。文部省留學生として英国に滞在し、後東京大学その他諸大学に教授であつた。兄姉に愛され、夫君にもいたはられ年よりも若々しく、美しい夫人は、昭和三十一年秋、年長の人々をおいて、愛惜されつつ地上を去つた。嘉一氏も昭和四十二年夏、夫人のあとを追ふ如く逝去された。